



自然が教えてくれること

理事 岡崎 淳



この度のTOKYO保育フォトコンテストでは、私が園長を務める昭島市の多摩保育園に栄えある会長賞をいただきありがとうございました。この写真のロケーションは、秋になると一面が黄金色になる当園に隣接する昭和公園(昭島市)です。奇跡的な一枚という訳ではなく、日頃の遊んでいる様子を撮影したものです。「ロケーションがいいね!」とお褒めをいただきましたが、評価された点は、子どもたちがあちらこちらを向いて、思い思いの姿をしているところではないかなと思いました。これからも「思い思いのことが出来る保育」を心がけていきたいと改めて思います。この受賞を、子どもたちや保護者、職員と喜び、これからの保育の励みにしていきたいです。この場をお借りして御礼申し上げます。そして、このフォトコンテストが少子化社会の一助となるよう期待しています。

先日、奥多摩で特別天然記念物に指定されているニホンカモシカに会いました。ニホンカモシカは好奇心旺盛で、人間をじっと見つめ逃げない習性があり、野生動物ながらちょっと親しみを感じます。山奥の神社ということもあり、それはまるで神の使いの様にとても高貴なものにも見えました。地元の方によると珍しいことではないそうです。昭和30年頃に3千頭まで減少し特別天然記念物に指定されましたが、その後、10万頭にまで増加し、他県では害獣として駆除されているという現実も知りました。

なぜ、奥多摩の山にいたのかというと、サマーキャンプ(お泊り保育)、たま-CAMP(親子キャンプ)のフィールドとなっているため、実踏も含めると毎月のように足を運んでいます。たま-CAMPは「親子で奥多摩の自然に親しみ、森の大切さを学ぶこと」を目的として、四季を通して年4回開催しています。「奥多摩都民の森」や「山のふるさと村」にステイしながら、沢遊び・トレッキング・鍾乳洞探険・カヌーやSUP・ナイトハイク・滝探険・登山・雪山遊び・キャンプファイヤーと様々な体験プログラムを提供し、子どもも大人も自然の中でヘトヘトになりながら遊んでいます。自然の中にいると、色々な命がありその中に自分があるという感謝の心へも繋がります。

奥多摩湖(小河内貯水池)は、東京都水道局に管理されており、遊泳やボートなどは禁止されています。そのため水が澄んでいてコバルトブルーの綺麗な湖です。その湖底には小河内村が眠っています。帝都の御用水のためと計画されたダム建設は、昭和13年に始まり、戦争による工事中断を経て、昭和32年、945世帯の移転と87名の尊い犠牲のもと、19年余りの歳月と約150億円の総工費をもって完成しました。当時、移住を余儀なくされ、小河内から昭島へも移住をされた方々がいました。その経緯は、一言では伝えられない複雑な事情や村民の感情があったようです。この地域のビジターセンターを訪れると、森の循環や自然の恩恵だけでなく、かつての自然と共に生きる人々の営を肌で感じることもできます。

最近では、アウトドアブームにより休日の奥多摩周辺は登山やツーリングで大変な賑わいです。しかし、町では過疎化が進み子どもや若者が減少しています。そのような中「奥多摩町小河内から奥多摩町、さらには西多摩全体を盛り上げていきたい!」と、地元の若者が「OBC(Ogouchi Banban Company)」という団体を立ち上げ、力を合わせて町おこし活動を行っていると聞きました。町おこしエンターテイメントでは、奥多摩の魅力を歌詞に込めたオリジナルソングを子どもたちと熱狂的ライブで披露しています。この活動で中心となるパフォーマー「かん先生」は、奥多摩町初で唯一の男性保育士とのことです。

山の暮らしは不便かもしれません。しかし、その不便さの中から見えてくる豊かさを感じることができます。子どもたちと共に、小さな贅沢を大切にしていきたいと思います。子どもたちと奥多摩へ出掛け、そのロケーションでフォトコンテストへ応募してみたいはいかがでしょうか。